

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Survey methods for the study of expressivity in the dialects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 亮一, 真田, 信治, 沢木, 幹栄, SATO, Ryōichi, SANADA, Shinji, SAWAKI, Motoei メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001065">https://doi.org/10.15084/00001065</a>

# 表現法の調査方法について

佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄

## はじめに

言語変化研究部第一研究室では、文法項目を中心とする表現法の全国的調査研究を計画し、昭和52年度から、その準備調査に着手した。これに先立って、昭和51年度には、「表現法の全国的地域差を明らかにするための調査方法に関する研究」の題目の下に、科学研究費補助金（総合研究B，研究代表者 飯豊毅一）の交付を受け、全国各地の方言研究者を共同研究者として、表現法の全国的調査を実施する際の調査のあり方について検討したが、その際に、共通調査票に基づく小規模な実験的調査を各地で実施し、その結果を、この研究のための参考資料の一つに加えた。

実験的調査の結果は当研究室に集められ、現在、その整理・分析を進めつつあるが、ここでは、その一部について中間報告を行う。

当研究の研究代表者、および研究分担者・協力者の氏名（所属）は次のとおりである（所属は昭和51年4月当時）。

### 各地区担当の分担者・協力者

井上史雄（北海道大学）、上野善道（弘前大学）、本堂寛（岩手大学）、加藤正信（東北大学）、W. A. グロータース（上智大学）、加治工真市（東京都立大学）、佐藤茂（福井大学）、川本栄一郎（金沢大学）、馬瀬良雄（信州大学）、山口幸洋、佐藤虎男（大阪教育大学）、鏡味明克（岡山大学）、室山敏昭（広島大学）、吉田則夫（高知大学）、奥村三雄（九州大学）、神部宏泰（佐賀大学）、上村孝二（鹿児島短期大学）。

### 国立国語研究所所属の担当者

飯豊毅一、佐藤亮一、真田信治、沢木幹栄。

表現法の調査を実施するにあたって、あらかじめ検討しておくべき問題点として、次のようなことがらが考慮される。

## 1. 話者に関して

### 1-1 年齢差

将来の全国的調査で、老年層だけを対象とするとしても、また、老年層ばかりでなく、より若い世代の話者を対象とするとしても、対象とすべき話者の年齢層の限定のしかたが問題となる。年齢差のあらわれ方は項目の性格によっても異なることが予想されるので、この点についての検証も必要である。

### 1-2 男女差

おそらく全国調査では一部の項目について男女とも調査する必要があるだろうが、それを必要とする項目について検討すべきである。また、調査の基本的対象として、男女のいずれを採るべきかという点についても純粋方言の保存度、言語反省能力、居住歴の純粋性を考慮したときの話者の得やすさなど、種々の観点から検討すべきであろう。

### 1-3 職業・階層の差

地域社会において職業・階層による言語差が認められる場合、その中の特定層の言語も本調査の対象とすべきかどうか検討しておくべきである。

### 1-4 個人差

この場合、A) 言語使用の個人差、B) ある質問文に対して複数の回答(併用)がありうるのに、その一部しか回答されないために調査結果にあらわれる擬似的個人差、の二つが考えられる。表現法の調査では、話者の条件や項目の意味・用法、質問のしかたを厳しく限定しても、なおこの種の個人差があらわれることが予想される。その場合、どのような項目(質問法)に対してどの程度の個人差が認められるかが問題であり、この点についても検証的調査を行いたい。

### 1-5 その他

方言調査、とくに言語地理学的調査では、話者の学歴、居住歴、両親の出身地などを厳しく限定するのが通例である。一方、語彙などの調査とは違って、文法項目の調査では、話者の言語内省能力がとくに高いことが必要であ

るとか、居住歴に関しても、複数地居住の経験者の方が他との比較において自己の方言を内省しうるなどの考え方があり、これらの点についても、実験的調査、準備調査等を通して知見を得たい。

## 2. 調査地域・調査地点に関して

### 2-1 市街地と郊外

共通語化の程度の小さい純粹方言を得ることが目的であれば、なるべく郊外に地点を選んだ方が適切な話者が得やすいと予想される。一方、現代の言語の実態を把握することをねらうならば、都市部をも積極的に調査地点に選ぶべきであろう。また、言語地理学的な観点からも、都市部の言語を無視すべきではないとする考え方がありうる。

### 2-2 地点密度

琉球などの、地域差が著しい地方、また、方言の古態性の大きい、いわゆる辺地などは地点密度を高くすべきとの考え方がありうる。また、北海道の地点密度（『日本語地図』では他の地方に比べて著しく小さい）のとり方についても検討しておきたい。

## 3. 質問法に関して

### 3-1 質問形式

項目に応じて、「なぞなぞ式」「標準語翻訳式」「語形選択式」などの諸形式を適宜使い分けるべきかと思われるが、これに関連して、同一項目を複数の形式で質問した場合の結果の違いについて検証を試みたい。話者が調査の意図を理解できるよう質問文（wording）に工夫をこらすことは当然であるが、この場合、質問文の長さや、一質問文における注目点の数の適切さについても検討すべきであろう。なお、自然対話にやや近い形で表現法の調査を行うことが可能かどうか、その結果と他の質問形式による結果にどのような差があらわれるかについても実験的調査を試みたい。

### 3-2 質問法の統一・併用の扱いなど

言語地理学的調査では、一定の質問文によって淡々と調査すべきであって、調査者が勝手に質問文を変えるなどの行為は、結果の質の統一を乱すものとして極力避けるべきとされる。しかし、一質問文に対して多様な回答が

予想される表現法の調査では、一定の質問文によって調査するにしても、その第一答のみに満足せず、その項目に関して、さらにつっこんだ質問を積極的に行うべきかもしれない。その結果1項目について多用な回答（併用）が得られたとき、それらの用法の差に関する情報をどのように探索し記録すべきかが問題となる。

### 3—3 隣接用法・隣接場面など

一つの質問文に対する回答（表現）の多様性は、隣接意味、隣接構造、隣接場面などにも密接にかかわるものである。もし、意味・用法を適切に限定し、場面（話される場所・状況、話す相手、話者の気分など）をきわめて具体的に設定した質問文を用意するならば、理論的には単一に近い回答を得ることが可能なはずである。現実にはそれがどの程度に可能であるのか、また、それぞれの質問についての回答は、隣接分野の項目の回答と相互にどのようにかかわるのか、といった問題についても検証したい。また、待遇表現に関する項目では、場面（とくに対者）の枠をどのように設定すべきかという点が重要な課題となる。

以上の問題のうち、このたびの実験的調査では、1—4（個人差）、3—1（質問形式による差）、3—3（隣接用法・隣接場面との関係）の問題を中心的課題としてとりあげ、それらの問題について検証するために、全部で100の項目から成る調査票を作成した。

調査票の概要は次のとおりである。

- \*待遇表現に関する項目（標準語翻訳式）—No. 1～19
- \*推量表現に関する項目（同）—No. 20～29
- \*意志表現に関する項目（同）—No. 30～33
- \*勧誘表現に関する項目（同）—No. 34～37
- \*強調・念押しなどの文末表現に関する項目
  - なぞなぞ式—No. 38～44
  - 対話式—No. 45～49
  - 標準語翻訳式—No. 81～88

\*アスペクトに関する項目（語形選択式）—No. 52～66

\*場所・方向・時間・目的などをあらわす格助詞に関する項目

標準語翻訳式—No. 67～80

語形選択式—No. 89～100

対話式—No. 50～51

以上のうち、本稿では、〔I〕待遇表現調査における場面の設定に関する問題（No. 1～19）、および、〔II〕格助詞項目における「翻訳式」（No. 67～80）と「選択式」（No. 89～100）との比較、同、「翻訳式」（No. 68）と「選択式」（No. 90）と「対話式」（No. 50～51）との比較、について、整理・分析した結果を報告する。

なお、上記〔I〕は真田信治、〔II〕は沢木幹栄が、それぞれ、資料の整理・分析および原稿の執筆を担当した。

同一地点における話者の個人差の問題については、各地点で、60歳以上の老年層の男性5人（以上）について個別に調査（面接）し、それらの間の回答の違いをみることにした（一部の地点では、女性の話者を含めて調査しているが、これらも参考資料として分析の対象に加えた）。

調査は、昭和51年12月から52年3月にかけて北海道から沖縄までの、計21地点で行った。原則として各地区担当の研究分担者が調査にあたったが、一部の地点では、臨時の協力者を含めて、複数の調査者により調査が行われた（この場合、話者間の回答の差が調査者に左右されている可能性についても考慮しなければならない）。

調査地点、調査者の氏名、話者の生年を掲げておく。（Mは明治、Tは大正であることを示す。なお「女」と記した場合以外はいずれも男性の話者である）

1. 北海道増毛郡大別荘（井上史雄）—M34・M36・M37・M41・M42
2. 青森県八戸市（上野善道）—M30・M31・M36・M39・T4・T6
3. 岩手県二戸郡安代町（本堂寛）—M40・M42・M43・T2・T5（女）
4. 福島県会津若松市（飯豊毅一）—M24・M30・M34・M34・M40・M45
5. 新潟県西蒲原郡巻町（沢木幹栄）—M40・M42・M44・M44・T5
6. 千葉県館山市大戸（池田広昭，加藤泰彦，佐々木英樹，佐藤紀史夫，田

- 中ナツ子) — M29 · M31 · M34 · M37 · M37
7. 長野県上伊那郡中川村大草下平 (馬瀬良雄, 沖裕子) — M28 · M31 · M32 · M37 · M38
  8. 愛知県海部郡佐屋町 (山口幸洋) — M27 · M31 · M36 · M38 · M44
  9. 石川県鳳至郡能都町字出津 (川本栄一郎) — M32 · M33 · M34 · M40 · M42
  10. 福井県武生郡片尾町 (三好真理) — M32 · M35 · M37 · M40 · M40
  11. 奈良県吉野郡十津川村 (佐藤虎男) — M39 · M41 · M42 · M43 · T1
  12. 和歌山県田辺市 (佐藤亮一) — M20 · M27 · M32 · M41 · T1 · T4
  13. 岡山県岡山市 (鏡味明克) — M30 · M34 · M35 · M41 · M41
  14. 広島県佐伯郡冲美町三吉 (室山敏昭) — M26 · M31 · M33 · M37 · M40
  15. 高知県須崎市浦の内東分 (吉田則夫) — M28 · M39 · M39 · M40 · M45 · T11
  16. 福岡県久留米市国分町 細 永 (奥村三雄) — M24 · M37 · M39 · M40 · M45
  17. 熊本県天草郡五和町鬼池 (神部宏泰) — M35 · M38 · M39 · M40 · M40
  18. 宮崎県都城市庄内 (飯豊毅一, 佐藤亮一, 真田信治, 沢木幹栄, 白沢宏枝) — M36 · M37 · M37 · M44 · T6
  19. 鹿児島県鹿児島市下福元 (田尻英三) — M25 · M35 · M40 · T2 · M22 (女)
  20. 鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋 (真田信治) — M26 · M37 · M39 · M25 (女) · T3 (女)
  21. 沖縄県名護市 (加治工真市) — M37 · M40 · T2 · M27 (女)

以下、本文、あるいは表の中に引用する地点名は、各地点の(道)県名(No. 20の地点では「奄美」の称)を用いることにする。

なお、〔I〕では、科学研究費による調査とは別に、当研究室で行った調査の結果を加えている。この調査の地点、調査者、話者等については、179 ページを参照してほしい。

## I 待遇表現の調査における場面の設定（真田信治）

### 1. はじめに

表現法という範疇において、いわゆる待遇表現法は重要な位置をしめよう。日本において、待遇表現法は、表現法のいわば基幹的部分であるといっても過言ではない<sup>1)</sup>。

本章では、待遇表現の見地からの場面差（主として対者による差）による表現形式のバリエーションの把握に焦点をあてて検討することにした。

待遇表現の見地からの場面といっても、現実には、心理的な、あるいは社会的なもろもろの要因が複雑にからんでおり、場面場面での表現形式もまた複雑多岐にわたっていることが予想される。それらを包括的に扱うことは容易ではない。したがって、ここでは、場面差というものを、会話の場における対者の差によるもの限定して考えることにした。すなわち、周囲を同一な状況に設定した上で、対者のみを相互に交換して、それぞれに応じた表現のバリエーションをみることにしたわけである。

### 2. 調査地点・インフォーマント

調査地点は前章に掲げた通り、全国の主要21地点である。各地点において、原則として生え抜きの老年層5名をインフォーマントとした。各地の調査者の名および、インフォーマントの属性については、前章を参照のこと。

### 3. 場面設定について

設定した場面（状況）は、次のようである。

- I. バスの停留所に一本の傘が置いてありました。そこで、そばにいた□□にその傘を指して、「これはあなたの傘か」とたずねるとします。その場合はどのように言いますか。
- II. 道を歩いていたら、むこうから□□が一人でやってきました。その□□にむかって、「あなたはどこに行くのか」と行先をたずねるとします。その場合はどのように言いますか。

以上の状況においての□□内に代入する対象として設定したのは、A. 小学校の校長先生 B. お寺の奥さん C. 見知らぬ紳士 D. 自分の父親 E. 見知らぬ若者 F. 親しくしている友人 G. 近所の顔見知りの若者 H. 自分の息子 I. 自分の妻 の9者である。

それぞれの設定理由を概説する。

A, Bは、地域社会において、方言人が敬意ある表現をもって接するであろうと予想される人物である。CおよびEは、いわゆる親疎関係における“疎”に当たる人物として設定したものである。一方、F, Gは、“親”に当たる人物として設定したものである。

DおよびH, Iは、いずれも家族内での人物である。特に、H, Iについては、方言人が、いわばぞんざいな表現をもって接するであろうと予想される対象である。

なお、いわゆる卑罵表現を得ることを目的としての若干の項目をも調査したが、本稿ではその結果の記述は割愛する。

#### 4. 調査結果とその分析

調査に当たっては、I「これはあなたの傘か」およびII「あなたはどこに行くのか」の、ある部分に注目点を置くということではなく、これらセンテンスの全体にあたる表現形式をすべてそのままに記述することにした（ただしイントネーションは無視）。これは現実の言語がセンテンスとして運用されているという点を配慮してのことである。

ただし、本稿では、得られた表現形式を個々の部分に分解して扱う。これは、あくまで、それぞれの部分の表現パターンを考察するための便宜的な手段である。

以下、得られた資料を図表化し、それぞれの項について解説を加える。そして、その過程で待遇表現調査の問題点を検討する。なお、上掲の対者(A～I)のうち、A～Dを対象とする場面を一応“上位場面”、E～Iを対象とする場面を一応“下位場面”と称する。ただし、これは、あくまでも仮称である。

##### (1) 「これはあなたの傘か」(その1)

表1 「これはあなたの傘か」(その1)

場 面 場 面 (対者)	地 点	北 海 道	青 森	岩 手	福 島	新 潟	千 葉	長 野	愛 知	石 川	福 井	奈 良	和 歌 山	岡 山	広 島	高 知	福 岡	熊 本	宮 崎	鹿 兒 島	奄 美	沖 縄	
校長先生					◇	◇◇				□			✂			✂			✂	+	+		
お寺さん				◇	◇◇	◇◇	□						✂			✂			✂	+	+		
見知らぬ紳士				◇	◇◇	◇◇							✂			✂			✂	+	+		
父				◇	◇◇	◇◇	◇◇		✂				✂			+			+	+	+		
見知らぬ若				◇	◇◇	◇◇		◇	◇				✂			+			+	+	+		
親しい人				◇	◇◇	◇◇	◇◇	◇	◇				✂			+			+	+	+		
近所の若				◇	◇◇	◇◇	◇◇	◇	◇				✂			+			+	+	+		
息子				◇	◇◇	◇◇	◇◇	◇	◇				✂			+			+	+	+		
妻				◇	◇◇	◇◇	◇◇	◇	◇				✂			+			+	+	+		

〔凡例〕 □ オマエサン    ◇ オマエサン    ○ オマサン    ⊕ オマンサン    □ オマサマ    ⊗ オママサン    ✂ オマハン

◇ オメーサン    ◇ オメ    ◇ オマン    ⊕ オマン    □ オマサマ    ⊗ オママサン    ✂ オマハン

◇ オマエ    ◇ オマエ    ◇ オマエ    ⊕ オマエ    □ オマエ    ⊗ オマエ    ✂ オマエ

表1は、「これはあなたの傘か」の傍線部分にあたる表現形式のうち、いわゆるオマエ系統と考えられる語形をまとめて、その各地点での現われ方を示したものである。表での符号の数は、それぞれの語形を回答したインフォーマントの数に対応する。

オマエ系の語形は、熊本、奄美、沖縄を除いて、広く全国から採集された。なお、凡例のうちのオマエ（サン）は、[omae (saN)], [omae (saN)], [oma<sup>i</sup> (saN)]などをまとめたものである。オマー（サン）は[omæ: (saN)], [ome: (saN)], [ome: (saN)]などをまとめたものである。また、オメ（サン）は、[ome (saN)], [ome (saN)]などをまとめたものである。

接尾辞のサンの付いた語形は、当然のことではあるが、主として上位場面に現われている。一方、付加しないままの語形は、各地ともに主として下位場面に現われている。両者は、ほぼ「見知らぬ紳士」と「父親」あたりを境として分かれるようである。

和歌山では、上位オマハン、下位オマエである。また、岡山では、上位オマエサン、中位オマン、下位オマエである。一方、鹿児島では、上位オマンサン、中位オハン、下位オマエのようであるが、オマンも各場面に現われてきている。

## (2) 「これはあたの傘か」（その2）

表2では、「これはあなたの傘か」の傍線部分にあたる表現形式のうち、アナタ系の語形および、共通語のレベルでの形式と考えられるものをまとめて示した。

ここに指摘すべきことは、場面による表現のバリエーションをみるという立場において、対象になる言語形式は必ずしも方言のレベルでの形式に限られるものではなく、いわゆる共通語のレベルでのものも含まれてくるという事実である。

地域言語の中には、日常普段のくつろいだ生活の場に使われることばと、改まった、いわば公的な場において使われることばがある。後者は、概念的には、全国に通用する言語、いわゆる全国共通語という観点でとらえられようが、その地域言語の使用者にとっては、あくまで自分の生活語と意識されるも



表3 「これはあなたの傘か」(その3)

地点 場面 (対者)	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
校長先生																				●	□
お奥さん																				●	□
見知らぬ紳士																				●	□
父親																				●	□
見知らぬ若者		↑	↑	↑	○														▲	★	✦
親しい友人		↑	↑	↑	○				○					中	△				▲	★	✦
近所者	⊗	↑	↑	↑	○	⊗	⊗		△					△	△				▲	★	✦
息子	⊗	↑	↑	↑	○	○			△					△	△			▲	▲	★	✦
妻	⊗	↑	↑	↑	○	○			△					△	△			▲	▲	★	✦

(凡例) ● ナ ○ ウンジュ ▲ フレ ▲ フリ □ ウンジュ ↑ ヤ ▲ ワイ ↑ ンガ ⊗ テメー ⊗ ソッチ

のであろう。このような意識は待遇表現形式の機能に直接かかわってくる。すなわち、体系的にはレベルを異にする形式を包含して待遇表現の運用がなされていると考えられるのである。

表2に掲げた語形の中では、アナタ [anata, anada], アンタ [anta, anda] が圧倒的に多い。両形とも上位場面に現われるものであるが、アンタの方が比較的下位の場面にも現われてきている。ところで、各地のインフォーマントが、この両形を少なくとも彼にとっての目上にあたと推定される人物に対しても使用している点は、いわゆる東京語の場合での運用とは若干異なるようである。

一方、アンタサン、アータという語形も現われるが、前者は、青森、石川に、後者は高知、福岡に、地域が限られている。高知では、アナタ—アンタ—アータの順で対者への敬意度が示されている。

なお、オタク（サン）は、主として「見知らぬ紳士」に対して用いられるようである。ただし、奈良では、「見知らぬ若者」、福岡では「お寺の奥さん」に対しても一部で用いられている。また、キミは、広く各地に現われているが、この語形は、下位場面、すなわち、同僚や年下の者に対する場合での表現形である。

### (3) 「これはあなたの傘か」(その3)

表3では、「これはあなたの傘か」の傍線部分にあたる表現形式のうち、表1および表2に掲げた語形以外の代名詞を示した。主として下位場面に現われてくるものである（ただし、奄美、沖縄での場合は別）。

北海道にはテメー、青森、岩手にはンガ、そして、福島にはニシヤの類が見られる。

ところで福島での調査の過程で、いわゆる罵倒的な表現としてはンガが存在するという旨の報告が得られたことは注目される。東北北部の下位場面で現われるンガが東北南部では、より下位の場面に潜行して存在しているわけである。同様に福島の下位場面でのニシヤの類も、千葉などには、より下位の場面での表現形として存在しているようである。今回のような調査の網ではひっかからないこれら語形をどのように採掘していくか、その採掘のためには、どのよう

表4 「これはあなたの傘か」(その4)

地点 場面 (対者)	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	鹿児島	奄美	沖縄
校長先生		+	+	+			+		+	+	+	+						+			+	
お寺さん	0	+	+	+			0		0	0	0	0	0			0	0	0	0	0	0	0
見知らぬ紳士								0					0								0	
父親	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
見知らぬ若者																						
親しい友人			0																			
近所者			0																			
息子		0																				
妻			0																			

(凡例) + センセー 〇 オクサン、ジーチャン、トーチャン、オトン、  
 〇 オヤジ、ニーサン、アシチャン、ニセドク、  
 オ ユツカハンなど  
 人名  
 ・ 対称詞部分なし

な場面設定をしたらよいのか、今後に検討すべき課題である。

西日本の各地では、ワレ、ワリ、ワイなどワレ系の語形が分布する。この系統の語は、北陸地方あたりにも用いられているはずである(注2)が、今回の調査では現われなかった。

奄美では、上位場面でナが、下位場面でウラが現われる。ナは、新潟での下位場面で現われるナと語源的には繋がるものであろうが、地理的な直接の連関はないであろう。一方は上位場面に、他方は下位場面にと、その現われ方には興味深いものがある。

沖縄では、上位場面でウンジュが、下位場面でヤが現われる。ただし「父親」に対しての場合に限ってはナが現われている。このナは奄美では上位場面において広く使用されているものであることは注目されることである。

#### (4) 「これはあなたの傘か」(その4)

表4では、「これはあなたの傘か」の傍線部分にあたる表現形式のうち、いわゆる代名詞以外の語形をまとめて示した。

地域差はほとんど見られない。ただし、これら語形の現われ方には、対者による一定の傾向があるようである。たとえば、「校長先生」に対しての場面では、各地ともセンセーが圧倒的に多く現われている。また、「お寺の奥さん」および「父親」に対しての場面では、いわゆる親族名称が多用されている。前者で現われるのは、オクサンなどであり、後者で現われるのは、ジーチャン、トーチャン、オトン、オヤジなどである。

「親しい友人」や「近所の若者」に対しての場面では、若干の地点に対者の具体的な個人名も散見する。

なお、今回の調査では、「コノカサワ?」、「カサカサ!」といったような形で、いわゆる対称詞の含まれない表現も多く得られた。これらは一括して、“対称詞部分なし”としてこの表で掲げておいた。

#### (5) 「あなたはどこに行くのか」における対称詞

表5は、「あなたはどこに行くのか」という文脈における対称詞(注3)の有無に注目して作成したものである。なお、この表には、「センセー!」「オクサン!」「オマエサン!」などの、冒頭における、いわゆる呼びかけ語的に用い

表5 「あなたはどこに行くのか」における対称詞

場面 地点 (対者)	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
校長先生	<input type="checkbox"/>																				
お寺さん の奥	<input type="checkbox"/>																				
見知らぬ 紳士	<input type="checkbox"/>																				
父 親	<input type="checkbox"/>																				
見知らぬ 若者	<input type="checkbox"/>																				
親しい 友人	<input type="checkbox"/>																				
近所の 若者	<input type="checkbox"/>																				
息子	<input type="checkbox"/>																				
妻	<input type="checkbox"/>																				

【凡例】 ■対称詞を用いる □対称詞を用いない N無表現

られたものも含めてある。また、凡例で、“無表現”と記したものは、「そんな場面では何も言わない」、「相手にただ頭を下げるだけ」などの回答をまとめたものである。このような回答は「見知らぬ紳士（若者）」に対しての場合に特に多くあった。

この項目では対者によった相違、および地域差はほとんど見られない。九州や奄美、沖縄などにおいては、対称詞が他の地方と比較して多く現われるのではないかとの予想をたてていたのであるが、そのような傾向は、今回の調査による限り、ほとんど認めがたいようである。ただし、愛知、福井あたりでは、その現われ方が若干少ないようにも見うけられる。

なお、この項目に関して言えば、はたして、日常の自然会話と同様な表現が扱えられているかどうかについての問題がある。今回の調査は、いわゆる翻訳式によっているため、質問文に誘導されたケース（回答）もあるかと思われるからである。この項目については、その点を割り引いて考える必要があるだろう。

#### (6) 「あなたはどこに行くのか」

表6は、「あなたはどこに行くのか」の傍線部分にあたる表現形式を示したものである。なお、この部分では、後続の助詞との融合をおこなっているものもあるが、その場合には融合形のままだに掲げた。

全国的に上位場面では、ドチラという語形が現われてくる。一方、岡山にはドチリャが、青森、岩手、福島ではドッチが、上位場面のそれぞれ一部に現われている。ただし、青森でのドッチャは下位場面での使用語形である。

ドコは、各場面にわたって現われているが、注目されるのは、北海道や新潟などにおいて、このドコが、いわゆる方言形のドゴと場面によって使い分けられているという点である。すなわち、これら地点では、ドコは主として上位場面に、一方、方言形ドゴは主として下位場面に現われてくるのである。

岡山および九州の各地では、後続の助詞と融合した形が多く現われる。主にドケ(一)という形式であるが、宮崎の場合は、ドキーである。なお、特に、福岡、熊本あたりでは、これら融合形の現われるのが、主として下位場面である点に注意したい。ここでも、共通語形と方言形との場面による使い分けを指摘

表6 「あなただはどこに行くのか」

場面 (対者)	地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄	
校長先生		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
お寺さん		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
見知らぬ紳士		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
父親		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
見知らぬ若者		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
親しい人		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
近所の人		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
息子		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
妻		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

(凡例) ● ドチラ ● ドチリヤ ● ドッチ ● ドッチャ ● ドケ(一) ▲ ドキ(一) △ ダ(一) ▽ デッ

表7 「あなたはどこに行くのか」

場面(対者)	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千野	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
校長先生	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
お寺さん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
見知らぬ紳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
父親	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
見知らぬ若	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
親しい人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
近所者	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
息子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
妻	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(凡例)

● ○ イ

○ (ドケ)ー

★ サ

★ セ

カチ

ハチ

ー マチ

△ (タ)ーチ

△ 助詞部分なし

することができる。

奄美、沖縄には、ダ(一)という語形が見られる。このダ(一)は、場面に関係なく現われてくるものである。

なお、当項目に関して、奄美と沖縄とを比較すると、奄美の方が上位場面での使用形に共通語を取り入れる傾向が強いように見うけられる。

(7) 「あなたはどこに行くのか」

表7は、「あなたはどこに行くのか」という文脈での傍線部分にあたる表現形式を示したものである。この部分の形式については、前述したように、前部分の語形と融合しているものもあるので、その場合は融合形のままだけである。したがって、その形式は前の表6の凡例と重複するわけである。

この部分には表現形式ゼロの場合も多くあった。凡例では“助詞なし”として示したが、この“助詞なし”については若干注意すべき点がある。それは、各地の調査者の表記では表われていなくとも、はたして本当に助詞がないと言えるのかどうか判定のむづかしいケースがあるということである。助詞の存在を意識し、それを発話しているとのインフォーマントの内省にもかかわらず、現実の発声において、その部分が音声化されないケース、あるいはまた、音声化されていても、非常に微妙なために、それを聞きとりえず、表記されなかったケースなどが考えられるからである。

表7では、まず、エとニに注目したい。エは、どの地点においても各場面を通じて現われるのに対し、ニは、北海道の場合を除いて、上位場面に限って現われてくる。ここに明らかなように、この文脈についての両形の相違は地域的なものではなく、場面的なものである。(なお、愛知などでのイは、エの転訛かニの転訛か判断に迷うが、この表での分布からみる限り、エからの転訛と推測される。)

文脈を異にするが、かの「京へ筑紫に坂東さ」などから推して、九州あたりではニが他の地方と比較して多用されているのではないかとの予想をたてたのであるが、そのような傾向は、この文脈に関してはほとんど見られないようである。なお、今回の調査では対象地にならなかったが、少なくとも東京では、この文脈においてもニが多く現われるはずである。今後の検証課題ではある

表8 「あなたはどこに行くのか」(敬語の有無)

地点 場面 (対者)	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄	
校長先生	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
お寺さん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
見知らぬ紳士	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
父親	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
見知らぬ若者	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
親しい人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
近所者	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
息子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
妻	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

〔凡例〕

● 敬語あり

○ 敬語なし

Ⅰ 動詞部分の現われないもの

が、北海道の場合に、それが反映しているようにもみられる。

一方、地域的な観点から注目されるのは、いわゆるサの類の語形である。東北地方には、各場面を通じてサが現われてきている。遠く離れた九州の福岡、鹿児島には、サン、サイ、セが散見する。(新潟の一人に見られるサンは、具体的には「キョーワードチラサンデスカ」であって、東北などでのサ(ン)とは直接に繋がるものではないようである。)

北海道にもサが見られるが、北海道の場合、この語形は下位場面に限って現われてくる点、注意される。

奄美、沖縄では、ハチ、(ダ)一チ、カチなどの特徴的な語形が現われる。これらの語形は、いずれも同系のものであろう。音韻的事情を考慮するとカチがその祖形と推定されるが、その語源は明らかではない。

#### (8) 「あなたはどこに行くのか」(敬語の有無)

表8は、「あなたはどこに行くのか」の傍線部分にあたる表現形式に注目して作成したものである。「行く(のか)」の( )内にあたる部分(たとえば、イカレルンデスカ、イクカヨ、イクトなど)までを含めると、文末表現形式までをも見ることができるわけであるが、煩雑にわたるので、ここでは、これら文末部分は一応除いて扱うことにした。なお、今回の調査では、単に「ドコエ?」「ドコダ?」のような動詞部分の得られない表現もあった。

表8において、“敬語あり”としたものは、具体的には、いわゆる敬語動詞をとるもの(イラッシュル、オイデニナルなど)、および敬語助動詞の付加したもの(イカレル、イカッシュル、イキヤル、イキナサルなど)を示す。

さて、表8によれば、“敬語あり”の形式は上位場面に多く出現している。これは当然予想されることではある。“敬語あり”と“敬語なし”は各地ともに、ほぼ「父親」と「見知らぬ若者」あたりを境として分かれるようである。なお、この点から注目されるのは、「父親」に対する待遇表現である。奄美、沖縄などでは、「父親」は、完全に“敬語あり”の形式における対象とされるのに対し、その他の多くの地点では、主として、“敬語なし”の形式における対象とされる傾向にある。特に、岡山、高知、宮崎、熊本などでは、逆に「見知らぬ若者」の方が、「父親」よりも上位のものとして把握されるのであ

る。ここに、本土と琉球における「父親」に対する待遇の差を認めることができ興味深い。

ところで、ことわっておくべきことがある。それは、イカレル、イキヤルなどの波線部のようないわゆる助動詞の付加した形式をここで一律に“敬語”としたことについてである。これらの形式は、実際の運用としては、敬意を表わすものとして用いられているかどうか、厳密に言えば、不明なのである。現にイキヤルなどは、地方によっては、いわば“ぞんざい”な表現として意識されている場合もあるのである(注4)。

これらの点を勘案すると、いかに上位場面に現われてきている形式であっても、その形式をただちに敬意を表わすものとして認めるわけにもいかない、ということになる。また、そもそも、ここに上位場面として設定した対者自体が、はたして、待遇的に上位のものと各地において認定されているかどうかという根本的な問題がある。実際のところ、それらの点が明確に把握できていないか、個々の表現形式の待遇面についても云々することはできないはずのものである。

以上の観点から、当研究室では、ここに設定した対者としての個々の人物のそれぞれが、待遇的にどのように把握されているか、また、それぞれに対する表現形式が、その地の待遇表現形式全体の中でどのような位置を占めているのか、などの点に焦点をあてた一検証調査を九州南部の一地域で試みた(1972年2月中旬)。その結果の一部を以下に補足の形で報告しておきたい。

#### 付、待遇表現形式とその運用の実態

##### ——宮崎県宮崎郡田野町での事例——

各地の主要地点で実施した予備実験的調査の資料の一検証として九州南部、宮崎県の宮崎市から都城市に至る地帯の五地点において、各地点五名(生え抜き、老年層、男性)のインフォーマントを得て、次のような過程での調査を試みた。

I. 道で会って、相手に「どこに行くのか」と相手の行先をたずねる場合、相手によっていろいろかわった言い方をなさると思います。「どこに行くのか」

の「行くのか」のところをこの土地でのことばでいい言い方からぞんざいな言い方まですべておっしゃってみてください。〈各形式についての敬意の度合を確かめ順位づけをする。〉

Ⅱ. では上のような言い方をなさる相手は、あなたにとってどんな人でしょうか。具体的におっしゃってください。

Ⅲ. では、次のような人に対しては上のどの表現を使いますか。〈「小学校の校長先生」～「自分の妻」の九者についてのリストを提示。〉

<間隔>

Ⅳ. ①道を歩いていたら、むこうから小学校の校長先生が一人でやってきました。その校長先生にむかって「どこに行くのか」と先行をたずねるとします。その場合「行くのか」のところをどのように言いますか。

- ②……………あなたが日常尊敬している町の老人……………。
- ③……………見知らぬ紳士……………。
- ④……………自分の父親……………。
- ⑤……………見知らぬ若者……………。
- ⑥……………親しくしている友人……………。
- ⑦……………近所の顔見知りの若者……………。
- ⑧……………自分の息子……………。
- ⑨……………自分の妻……………。

Ⅰの過程では、当該地における「行くのか」についての表現形式の待遇面でのバリエーションの全体を把握することを心がけた。また、各形式の敬意の度合を確かめ、順位づけをした。

Ⅱの過程では、Ⅰで得られた各形式で待遇する具体対象についてインフォーマント自身の場合を確かめた。

Ⅲの過程では、前掲の「校長先生」～「自分の妻」の九者が待遇的にどのように認定されているかを見ることを目的として、それぞれに対し、Ⅰでのどの形式を用いるかを質した。(なお「お寺の奥さん」については、対者として不適当との調査者の意見もあったので、今回は「尊敬する老人」に変更した。)

Ⅳの過程では、ある具体的状況においての「校長先生」～「自分の妻」に対する表現の様相を探り、そこでの表現形式が、Ⅲでの回答と一致するかどうか

について検証を行なった。

なお、IVの過程の調査は、I～IIIとは時間的な間隔をおいて行なったことを付け加えておく。

調査を実施した五地点は、次の地点である。

- ① 宮崎県宮崎郡清武町
- ② 宮崎県宮崎郡田野町
- ③ 宮崎県北諸県郡山之口町青井岳
- ④ 宮崎県北諸県郡山之口町山之口
- ⑤ 宮崎県都城市（各町）

ただし、ここではスペースの関係上、このうちの②での場合の結果のみを掲げることとする。

田野町内でのインフォーマントおよび調査者は次の通り。

インフォーマント	調査者
A. 横山 登氏（明治36年生まれ）	——白沢宏枝
B. 松本民平氏（明治36年生まれ）	——真田信治
C. 長友安夫氏（明治37年生まれ）	——佐藤亮一
D. 花岩治美氏（明治40年生まれ）	——沢木幹栄
E. 川越 実氏（明治43年生まれ）	——飯豊毅一

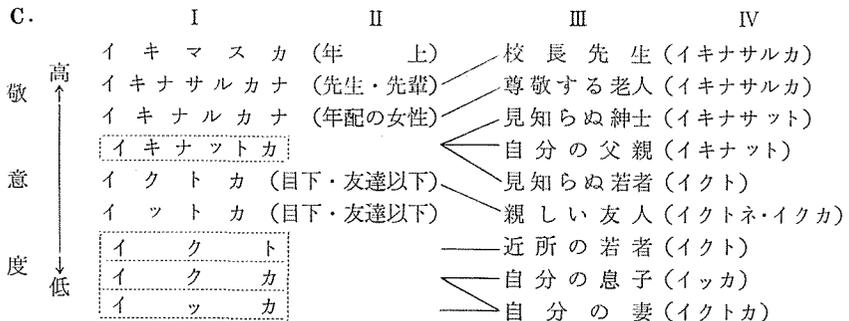
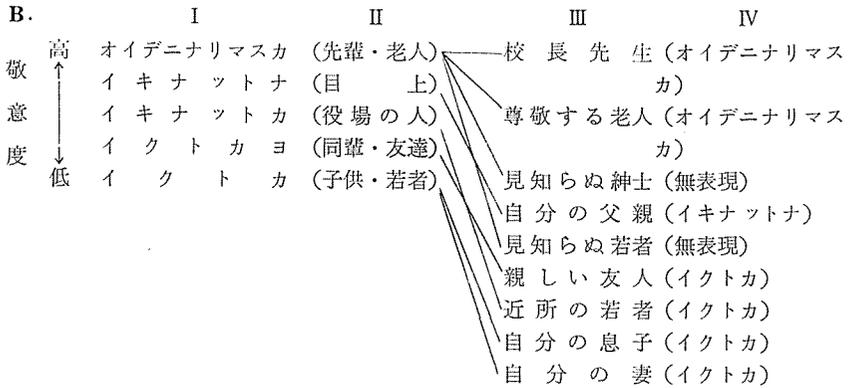
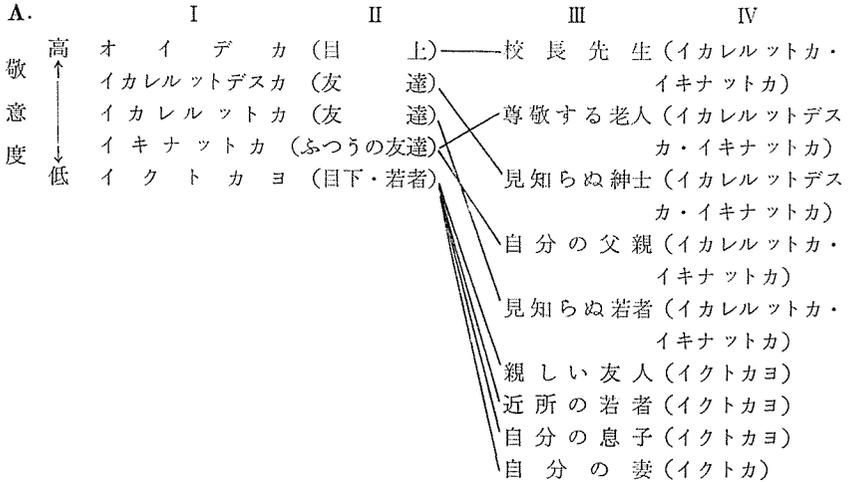
以下、具体資料について考察する。

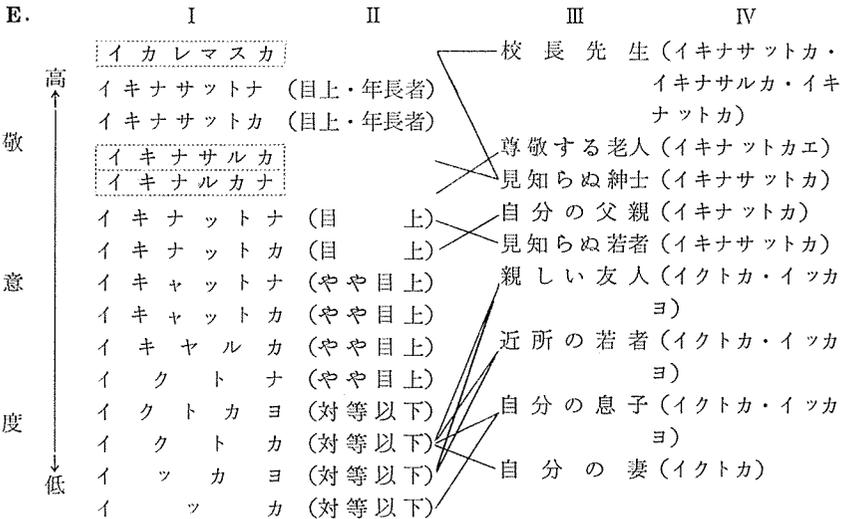
まず、Iの過程での質問についてのインフォーマントA氏～E氏の回答（表9に一括）をみよう。

個人差が著しい。インフォーマントの中には、役職を一時経験した人がいるが、すべて農業に従事している人々である。階層による差はないとみてよいと思う。にもかかわらず、待遇表現形式にこのような個人差が現われることは注目すべき事実である。（ただし、この場合、調査者側の調査態度の差も若干作用している可能性がある。この点は割り引いて考える必要があろう。）

A氏およびB氏は5つの形式を回答している。C氏の場合は（Ⅲの過程で新たに現われた形式を含めると）、9つの形式を回答している。D氏は6つの形式を回答している。そして、E氏の場合は（Ⅲの過程で新たに現われた形式を

表9





含めると、何と15もの形式を回答している。五氏を総合し、微妙な文末形式の差も含めて計数すると、表現形式の異なり数は、(Ⅲ,Ⅳの過程で出てきた形式も含めて)33にもなる。それぞれの語形の系統および敬意の度合を考慮して、一応の排列をすると表10のようになる。

次に、Ⅱの過程をみると、各インフォーマントとも、主として、「目上(年上)」、「友達(同輩)」、「目下(若者)」などといった指標で回答していることがわかる(表9-Ⅱ)。そして、概略的には、「目上(年上)」に対する表現形

表10

オイデニナリマスカ	イキナサルカナ	イキヤットナ	イクトカヨ
オイデデスカ	イキナサルカ	イキヤットカ	イクトネ
オイデカ	イキナサツナ	イツキヤットカ	イクトナ
	イキナサツカ	イキヤルカ	イクトカ
イカレマスカ	イキナサツ	イツキヤー	イツカ
イカレルツトデスカ			イクト
イカレルツトカ	イキナルカナ		イクカヨ
	イキナツナ		イツカヨ
イキマスカ	イキナツトカエ		イクカ
	イキナツトカ		イツカ
	イキナツ		
	イキナルカ		

式に、動詞+助動詞+助詞の構成をとるものも多く、一方、「目下（若者）」に対する表現形式に、動詞+助詞の構成をとるものが多いという傾向をよみとることができる。しかし、いわゆる中間段階の「友達（同輩）」などの場合について、どの形式を用いるかはインフォーマントによって相当のゆれのあることが認められる。

さて、Ⅲの過程での回答（表9）によると、「校長先生」～「自分の妻」の九者のそれぞれに対する待遇的な把握の仕方にもかなりの個人差のあることがわかる。しかしながら、全体的にみれば、「校長先生」～「自分の妻」といった排列は、待遇上の「目上」～「目下」の系列にはほぼ対応しているとみることができよう。ただし、いずれのインフォーマントも、「見知らぬ若者」の方を「父親」よりも上位のものと認定していることは注意すべきである（176ページ参照）。

なお、ここでの結果は、これら九名の対者のみの設定では、その地の待遇表現形式の全体は捕捉できないという点も明らかにしている。

ところで、Ⅲの過程での回答をⅣの過程での回答（表9）と比較してみよう。両者は、本来一致すべきはずのものである。しかし、結果によれば、部分的に一致するものもあるが、どのインフォーマントの場合にも、その回答は微妙に変化していることがわかる。ここには、待遇表現形式の運用にあたっての

flexibility の実態がそのまま現われているとも言えよう。待遇表現調査のむずかしさは、まさにこの点にあるわけである。

注1. 飯豊毅一「敬語研究資料について」(敬語講座10『敬語研究の方法』) 1974など参照。

注2. 真田信治「一集落内における敬語行動—全数調査から—」(日本語と文化・社会2『ことばと社会』) 1977.

注3. “対称詞”という用語に関しては、鈴木孝夫『ことばと文化』1973など参照。

注4. 加藤正信「全国方言の敬語概観」(敬語講座6『現代の敬語』) 1973.

## II 質問形式の違いによる回答の差 (沢木幹栄)

### 1. はじめに——三つの質問形式

「実験的調査」の調査票の中で No. 51, No. 67~80, No. 89~100 は、質問形式を変えることによって回答がどう違ってくるかを見るために設けた項目である。以下、どのような違いが回答の上に出てきたか、また、どこが変らなかったかを見てゆきたい。

質問形式として用意したのは、翻訳式、語形選択式、対話式の三つである。No. 67~80 は翻訳式、No. 89~100 が語形選択式で、No. 51 が対話式である。まず翻訳式の例として No. 67 を挙げる。

67 親しい友人にむかって「東京に行く」と言うとしたら、あなたはどのように言いますか

これが No. 67 の全文である。インフォーマントは「 」の内側の文を方言に翻訳したものを答えてくれるはずである。この項目のねらいは、アンダーラインを引いてある「に」の部分にあたる方言形を見ることである。アンダーラインを引いたのは、インフォーマントに対してというより、むしろ調査者に対して注目点を示すためである。この No. 67 に対応する語形選択式の項目は No. 89 である。No. 89 は、

89 親しい友人にむかって言うとき、あなたは

1. 東京ニ行く
2. 東京エ行く

### 3. 東京サ行く

のうち、どれを使いますか。そのほかの言い方をしますか。

となっている。インフォーマントがニ、エ、サのいずれかを使って答えた時には調査者は番号をマルでかこむことになる。しかし、各地点の調査者から本部に送られてきた整理票では実際の語形がそのまま記入されていることが多かった。No.67~80 は、No.76 と No.78 を除いて、No.90~100 とペアをなす。ペアをなす項目の番号とその内容は次の通り。

- |        |               |                  |
|--------|---------------|------------------|
| 67— 89 | 東京に行く         | (親しい友人にむかって)     |
| 68— 90 | ちょっと役場に行くってくる | (奥さんにむかって)       |
| 69— 91 | ちょっと本家に行くってくる | ( # )            |
| 70— 92 | あした6時に起きろ     | (孫にむって)          |
| 71— 93 | この本を机の上に置け    | (親しい友人にむかって)     |
| 72— 94 | この本をお前にかそう    | ( # )            |
| 73— 95 | この本をあなたにかそう   | (孫の学校の校長先生にむかって) |
| 74— 96 | この本をおれによこせ    | (親しい友人にむかって)     |
| 75— 97 | あそびに行こう       | ( # )            |
| 77— 98 | 汽車が駅に着いた      | ( # )            |
| 79— 99 | 息子を大工にする      | ( # )            |
| 80—100 | 息子が大工になった     | ( # )            |

ご覧のように、これらはすべて、東京方言では助詞「ニ」を使うことのできるケースである。しかし、これで助詞「ニ」の用法のすべてをつくしているわけではない。むしろ、いろいろな用法をカバーしつつ、各地の方言で「エ」、「サ」などの助詞と競合するようなものを選んだつもりである。はじめから「ニ」しか使えない場合と違って、「ニ」以外にもいくつか選択の可能性があれば、質問形式による差も出てきやすいだろう。

No. 51 は対話式の質問形式をとっている。項目自体は67—90に対応する内容のものである。「対話式」とは耳慣れない呼び名だが、この質問法を採用したのは新しい試みだと言えるだろう。今回の調査票では次のように質問文を設定した。

- 50 あなたが役場に出かけようとしたら奥さんから「どこに行くか」と聞かれたとします。その時奥さんはどんな言い方をしますか。いろいろな言い方があると思いますが、それを全部教えて下さい。(複数の回答の場合は、それをA, B,

C……とする)

- 51 それでは私が奥さんになったつもりで聞いてみますから「ちょっと役場に行ってくる」という返事をしてみて下さい。「A, B, Cの順に調査者が発話。それぞれに対する回答を記録する)

「対話式」という呼び名のいわれがお分りになったことと思う。No. 51はNo. 50なしでは成立しないのである。この質問形式は、文法調査を具体的場面に近づけようとする試みでもあった。

## 2. 分析に際しての問題点

回答の種類が限られているので、調査結果の分析はかなりの程度まで計量的に行うことが可能である。しかし、実際に資料を処理する段階で、同一語形と認定するかどうかをめぐるいろいろな問題が発生した。各地の方言の実態がよくわからないために、ある意味で独断的に処理した面があるかもしれないが、全体としてそう大きな間違いはしていないつもりである。

問題となったもので最も一般的なのは、68—90で「役場に」を、ヤクベー、*jakube*: 等という場合だが、これは熊本を除いて「ヤクバ」+「エ」と解釈した。岡山ではヤクビャーが得られたが、これも同様に解釈した。また「エキエー」「ウエー」のように先行する名詞が、イ段あるいはエ段で終わっている時に、語末を長音にただけで助詞らしきものはほかに見あたらないということがあがるが、この場合も、原則として、熊本以外は名詞に「エ」がついたものと判断した。(これらの場合、名詞に「ニ」がついたものが含まれている可能性もあるが、個々のケースについて客観的な判断を下すことが困難なため、このような統一的な処理法を採った。)

No. 71などで「ン」が出てきたが、これは「ニ」にあたるものと見なした。

熊本では、選択式で3という数字(これは調査票では「サ」に当る)が記録されていて、翻訳式では「サネ」が記録されているということがあった。これは同じものとして処理した。福岡でも「サン」に関して全く同様なことがあった。

熊本では、他に選択式で1という数字(これは調査票では「ニ」に当る)、翻訳式で「イ」が記録されているということもあった。「目標格には、九州全

体ニを使うが、たいていニはイに転じ、さらに前の母音と融合することもある」(『方言と標準語』356ページ)という記述に従えば、翻訳式の「イ」は「ニ」として扱うべきだということになる。そこで上記のように処理したのである。筆者は宮崎で調査を行った際、「おまえ」に当る語形は wai だが、「おまえに」は wari であるとの回答をインフォーマントから得た。これも同様の現象かも知れないが、確信が持てないので wari はニ、エ、サとは異なる、未知の助詞が wai についた形だということに、作業の都合上しておいた。

先に述べたように、調査の結果を計量的に処理することを目ざしたが、カイ自乗検定などはやっていない。それは母集団(地点で言うならば、こうした小調査を土台にして今後、実施されるべき大調査の時の総地点ということになる)からランダムな手続きで標本集団(地点で言えば、今回の調査地点)を取り出したとはいえないからである。調査地点を一つにしてそのかわりインフォーマントの数をうんと増やした方が調査法の比較によかったという批判もあるかも知れないが、それでは全国を見渡すことができなくなってしまふ。ただ今回の場合、調査者1人に対し一地点という割合だったので、ある地点である特徴が見られたとしてもそれが調査者の個性によるものなのか、それともその地点のもともとの性質なのか決め難いところがある。

### 3. 分析の結果

まず、対話式と他の質問形式との違いから見て行くことにする。

まず、表1をご覧いただきたい。この表は各質問形式間の回答の一致度を示したものである。一致度は次のようにして算出した。

あるインフォーマントがAという質問形式で答えた語形とBという質問形式で答えた語形が同じであれば、1を与え、異なれば0を与える。Aで複数の回答が得られた場合、そのいずれもが質問形式Bの回答と一致しなければもちろん0。質問形式A、Bでともに複数の回答が得られ、それらがすべて一致した時は1を与える。今まであげたどの場合にもあてはまらない場合——言いかえると、質問形式A、Bの回答が部分的にしか一致しない場合には0.5を与える。地点によってインフォーマントの数が異なるのでおのおのインフォーマ

ントに与えた得点を合計してインフォーマント数（別回答——後述のインフォーマントは数に入れない）で割る。これを一致度とした。表1を見ると、ほとんどすべての地点で90—68の組がNo.51を含む組より一致度が高いか等しい。

表2は首位の一致を表にしたものである。各インフォーマントの回答数を合計したものが一番多い語形をその地点で首位を取ったものとみなし、項目間の比較をおこなった。○をつけたのは2つの項目で首位が一致したもので、×をつけたのは一致しなかったものである。回答数は、インフォーマントが一つの語形だけを答えた時は1、複数語形の時は各語形に対して、語形数分の1を与える。語形数が2の時は1/2、3の時は1/3といった具合である。

表2では、51—68で×の数が1、51—90では3であるのに対し、68—90では1だけである。まあ一応満足できる一致度である。表1から、対話式は残りの二つの質問形式から少し離れたところに位置する質問形式だと言える。表3からも同じことが言える。表3は異り語形数の表である。ある地点で、ある項目に関して得られた全回答の中での異り語形数を表にし、更に1地点当りの平均語形数を算出した。異り語形数について見ると対話式は他の質問形式より多い。

対話式では助詞の比較を行うということから言うと不適当な回答が頻出した。例えば、あるインフォーマントは「ヤクバデコセキノモンダイデチョットイッテクル」と答えた。この「ヤクバデ」が「イッテクル」にかかるとはちょっと考えにくい。単に「役場だ」式の回答もあった。こうした不適当な回答（以下、「別回答」と呼ぶ）はNo.51では全部で7つあった。これに対し、No.68、No.90では別回答の数はゼロである。自然の会話では、「どこに行くか」という問いに対し、「ちょっと役場に行ってくる」だけでなく、いろいろな言い方が有るのが普通だろう。別回答が多く得られたということと、異り語形の多さは、対話式を用いることによってねらいどおり調査を具体的場面に近づけることができたためとも考えられる。別回答が多かった理由はもうひとつ考えられる。調査票の中では、No.51でどこに注目すべきかが示されていないのである。

対話式は別回答の多さから言って、ある特定の表現を得るというのには不利

である。もう一つ、対話法の短所は、まわりくどい調査法だということである。

次に、語形選択式と翻訳式の比較を行う。まず、表4を見ていただく。これは、各項目の地点ごとの内容一覧とでも言うべきものである。表の数値は、ある語形が全回答の中で占める比率を表わしている。例えば、五人のインフォーマントがいて、そのうち三人がエと答え、二人がサと答えた時はエは0.6でサは0.4である。一人のインフォーマントが複数の回答をしたときには、例によってその回答数分の1の値しか与えられない。だから、五人のインフォーマントのうち一人がエとサの二つを回答し、残りのインフォーマントがすべてエだったら、エは0.9でサは0.1ということになる。この表から、更に「ゆれの数値」を出して作ったのが表5である。ゆれの数値というのは、表4の各語形の比率をそれぞれ自乗したものを合計したものである。インフォーマント全員がある一つの語形のみを答えた時、ゆれの数値は1になる。逆にゆれの数値が0になるのは、すべてのインフォーマントが無限の数の語形を答えた時（もちろん不可能だが）である。ゆれの数値については、佐竹秀雄「表記のゆれを測る」(『電子計算機による国語研究XII』)を参照されたい。佐竹の“ゆれの尺度”はここでのゆれの数値とは考え方の大筋においては同じである。ただ、両者は、佐竹の“ゆれの尺度”とここでのゆれの数値を足すとちょうど1になるという関係にある。

ゆれの数値が小さい方が、答えがいろいろな語形に散らばっているということなのだが、表5を見ても、どちらかの質問形式が常にもう一方の質問形式よりもゆれの数値が低いとは言えない。むしろ、表5その1で宮崎の数値が他に比べて非常に低いこと、逆に長野から熊本にかけて数値の高い地点が続いていることのほうが目につく。宮崎の数値が低いのは、五人の調査者がそれぞれ一人ずつのインフォーマントを相手にした——言いかえると、調査のパラツキにインフォーマントのパラツキが相乗されたためであると、一応考えておく。長野から熊本にかけて数値が高いのは、これらの地点ではニとエの使い分けがはっきりしていることによるものだ。

表6は、異り語形数の表だが、ここでもどちらか一方の調査法の方が、常に

もう一方より数値が高かったり低かったりすることはない。

表6は、ある地点である項目に対してインフォーマントが平均いくつの答えを出したかを算出し、さらにそれから地点ごと及び項目ごとの平均を出したものである。語形選択式の方が数値が高いことが多い。語形選択式は選択肢をすべてインフォーマントの前で読み上げるので、常に複数語形の誘導を行っているのと同じ効果を持つ。そのためにこのような結果になるのだろう。表4で、千葉県では翻訳式の時はサがないのに、語形選択式になるとサが出てくるのも誘導の効果だろう。

調査のマニュアルで淡々と調査を行うよう指定してあったので、翻訳式の場合、第一答が出た後で、更に他の語形を誘導することはあまりなかったと思われる。そのことが表7のような形で質問形式のちがいによる差をはっきり出すことにつながったのだろう。

表8は一致度を表わしたものの、表9は首位の一致度である。一致度だけとってみても、かなりよい数字が出ている。翻訳式でも語形選択式でも実際の調査の時には大した差がないと言える。首位の一致度は非常に高い。ある地点で複数のインフォーマントを調査した場合、首位を占める語形はどちらの質問形式でも大体同じだということを、これは意味している。

以上、質問形式の違いによる回答の差について若干の分析を行った。さらに、格助詞以外の項目についての分析の結果を得た上で、今後の調査の方法について検討を加えることにしたい。

表1 項目間の一致度

項目	地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
51-68	0.4	0.58	1.0	0.25	0.6	0.3	0.8	0.7	1.0	0.0	1.0	0.75	0.9	1.0	0.83	1.0	1.0	0.25	0.8	0.7	0.75	
51-90	0.5	0.67	1.0	0.33	0.6	0.3	0.8	0.7	1.0	0.0	0.9	0.83	0.9	1.0	0.75	1.0	1.0	0.5	0.3	0.7	0.75	
90-68	0.5	0.92	1.0	0.75	1.0	0.4	0.8	1.0	1.0	1.0	0.9	0.83	0.2	1.0	0.92	1.0	1.0	0.4	0.5	0.8	1.0	

表2 項目間の首位の一致

項目	地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
51-68	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
51-90	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
68-90	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表3 異り語形数

項目	地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄	平均値
51	3	2	1	3	3	5	1	3	1	1	2	3	2	1	2	1	1	1	2	2	2	1	2.0
68	3	2	1	2	1	3	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3	2	2	1.57
90	3	2	1	2	1	3	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	3	3	2	2	1.67

表4 その1

地点	項目	89	88	90	69	91	70	92	71	93	72	94	73	95	74	96	75	97	77	98	79	99	80	100
北海道	ニ	0.2	0.6	0.1	0.6	0.4	0.6	1.0	0.8	1.0	0.8	1.0	0.9	1.0	0.9	0.8	1.0	1.0	0.8	1.0	0.6	1.0	1.0	1.0
	工	0.4	0.4	0.6	0.2	0.2	0.2														0.2			
	サ	0.4	0.3	0.2	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1				0.2	0.2		0.2	0.2				
青森	ニ	0.17			0.25	0.17	1.0	1.0	0.25	0.17	0.17	0.25	0.5	0.5	0.17	0.05	0.92	0.92	0.25	0.25	0.92	0.75	1.0	0.92
	工	0.17	0.17	0.08	0.17							0.08	0.17	0.17	0.05									
	サ	0.83	0.83	0.92	0.58	0.83			0.75	0.83	0.83	0.67	0.5	0.33	0.83	0.89	0.08	0.08	0.75	0.75	0.08	0.25	0.08	0.08
岩手	ニ			0.2		0.8	0.6	0.4	0.2	0.4	0.2						1.0	0.6	0.2	1.0	0.8	1.0	0.8	0.8
	工											0.2	0.4											
	サ	1.0	1.0	1.0	0.8	1.0	0.2	0.4	1.0	0.6	0.8	1.0	0.4	0.4	1.0	1.0	0.4	0.4	0.8	0.8	0.8	0.2	0.2	0.2
福島	ニ	0.17	0.08	0.25	0.17	0.25	1.0	1.0	0.42	0.5	0.92	0.58	0.92	0.81	0.75	0.75	0.75	0.5	0.42	0.39	1.0	1.0	1.0	0.75
	工	0.17												0.06							0.14			
	サ	0.66	0.75	0.83	0.83	0.75			0.58	0.5	0.08	0.42	0.08	0.13	0.25	0.25	0.25	0.5	0.58	0.47				0.25
新潟	ニ			0.2	1.0	1.0	1.0	1.0	0.8	1.0	1.0	0.8	1.0	0.5	1.0	0.8	0.5	0.8	0.5	0.6	1.0	1.0	1.0	1.0
	工	1.0	1.0	1.0	0.8				0.2			0.2		0.5	0.2	0.25	0.2	0.5	0.4					
	サ																							
千葉	ニ	0.5	0.4	0.4	0.3	0.3	0.8	1.0	0.7	0.47	1.0	0.86	0.88	0.47	0.88	0.66	1.0	0.86	0.88	0.4	1.0	1.0	1.0	1.0
	工	0.5	0.4	0.4	0.5	0.3			0.1	0.27	0.07	0.07	0.12	0.47	0.12	0.27	0.07	0.07	0.12	0.4				
	サ	0.2	0.2	0.2	0.4				0.27	0.27	0.07	0.07	0.06	0.06	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.2				
長岳	サ	0.2	0.2	0.2			0.2																	

表 4 その 2

地点	項目	67	68	69	70	71	72	73	74	75	77	78	79	80	81
長野	ニ	1.0	0.2	1.0	1.0	0.3	0.3	0.8	0.9	0.9	0.5	0.4	1.0	1.0	1.0
	エ	1.0	1.0	1.0	1.0	0.7	0.7	0.2	0.1	0.5	0.5	1.0	0.6		
	Ø								0.2	0.1					
愛知	ニ	1.0	1.0	1.0	1.0	0.8	0.2	1.0	1.0	1.0	1.0	0.3	0.7	1.0	1.0
	エ	1.0	1.0	1.0	1.0	0.2	0.8					0.7	0.3		
	ニ	1.0	1.0	0.1	1.0	1.0	0.7	0.9	0.8	1.0	1.0	0.4	0.8	1.0	1.0
石川	エ	1.0	1.0	1.0	0.9	0.3	0.3	0.1	0.2	0.2		0.2	0.2		
	Ø							0.2	0.6			0.4			
	ニ	0.2	0.2	0.2	1.0	0.6	0.4	1.0	0.8	0.8	1.0	0.2	0.2	1.0	0.9
福井	エ	0.8	0.8	1.0	0.8	0.4	0.6		0.2	0.2	0.2	0.8	0.8		
	Ø														
	ニ	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.2	1.0	0.75	1.0	1.0	0.2	0.1	1.0	1.0
奈良	エ	0.9	0.9	0.9	0.8	0.9	0.8					0.5	0.9		
	Ø								0.25			0.3			
	ニ	0.17	0.08	0.08	1.0	0.17	0.5	1.0	0.9	0.83	1.0	1.0	0.33	1.0	1.0
和歌山	エ	0.83	1.0	0.67	0.92	0.83	0.5		0.17			0.67	0.75		
	マナ		0.17	0.33											
	Ø								0.1						
岡山	ニ	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.8	0.8	0.8	0.2	0.1	1.0	1.0	1.0
	エ	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.2	0.2	0.2	0.2	0.8	0.9	1.0	1.0
	Ø														

表 4 その 3

項目	地点	67	89	68	90	69	91	70	92	71	93	72	94	73	95	74	96	75	97	77	98	79	99	80	100
広島	ニ							1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	エ	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
高知	ニ				0.08		1.0	1.0	1.0	0.17	0.33	1.0	1.0	0.83	0.67	1.0	0.83	1.0	1.0	0.33	0.5	1.0	1.0	1.0	1.0
	エ	1.0	1.0	1.0	0.92	0.83	0.92	0.83	0.83	0.83	0.67	0.67	0.33	0.33	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.67	0.67	0.5	0.67	0.5	0.5
福岡	ニ							1.0	1.0			1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	エ									1.0	1.0														
熊本	サ サン	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	ケ																								
宮崎	ニ	0.4	0.5	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	エ	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.4	0.4	0.5	0.8	0.87	0.6	0.4	0.3	0.5	1.0	0.9	0.8	0.8	0.8	0.7
鹿児島	サ サン	0.4	0.26	0.36	0.36	0.2	0.36	0.36	0.4	0.4	0.4	0.1	0.2	0.13	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	ケ	0.07	0.27	0.1	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27	0.27
鹿児島	ニ				0.17	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
	エ																								

表4 その4

項目	地点	67	68	69	70	71	72	73	74	75	77	79	80	99	100	
鹿兒島	ニ		0.4	0.2			0.2	0.2								
	エ	0.8	0.8		1.0	1.0	1.0	0.2			0.4	1.0	0.8	0.75	1.0	
	サ (サ)		0.2				0.2	0.6	0.2	0.2						
	スエ							0.2	0.2							
	ズイ		0.4	0.1	0.4	0.2										
	アテ								0.2	0.4						
奄美	ゾ	0.2	0.2	0.7	0.4	0.2	0.6	0.4	0.2	0.6	0.4	0.1	0.25	0.6		
	ケー									0.9	0.75					
	長音													0.2	0.25	
	ニ	0.5	0.4	0.2	0.2	0.3	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4
	カチ	0.4	0.6	0.7	0.3	0.6	0.6	0.6				0.5	0.6	0.1	0.2	0.2
	ゾ	0.1	0.1	0.1	0.5	0.1						0.3	0.2	0.5	0.6	0.4
沖縄	nam					0.2	0.2									
	ga									0.8	0.8					
	ba													0.2		
	ni															
	ngat	1.0	0.25	0.25	0.5	1.0	0.62	0.75	0.5	0.75	0.25	0.17			0.25	
	長音		0.75	0.75		0.38	0.25	1.0	0.5	0.25	0.75	0.5	0.5	0.25	0.25	
ゾ													0.75	0.75	0.75	
nga																
na										0.5	0.5					
													0.5	0.33		

表5 その1 ゆれの数値の項目ごとの平均

89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
67	68	69	70	71	72	73	74	75	77	79	80
0.81	0.81	0.76	0.95	0.67	0.81	0.74	0.77	0.76	0.66	0.88	0.89
0.73	0.78	0.70	0.95	0.76	0.87	0.75	0.85	0.80	0.67	0.91	0.92

表5 その2 ゆれの数値の地点ごとの平均

地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	新潟	長野	愛知	石川	福井	奈良
選択式	0.75	0.72	0.74	0.67	0.83	0.60	0.82	0.93	0.85	0.82	0.90
翻訳式	0.78	0.72	0.90	0.73	0.85	0.73	0.87	0.93	0.88	0.81	0.88

地点	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
選択式	0.89	0.89	1.00	0.83	0.95	0.95	0.48	0.66	0.65	0.74
翻訳式	0.84	0.90	1.00	0.89	0.97	0.92	0.58	0.64	0.65	0.67

表6 その1 異なり語形数の項目ごとの平均

89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
67	68	69	70	71	72	73	74	75	77	79	80
1.62	1.67	1.81	1.10	1.90	1.67	1.86	1.67	1.71	2.10	1.38	1.38
1.67	1.57	1.90	1.14	1.67	1.38	1.81	1.48	1.48	1.90	1.38	1.29

表6 その2 異なり語形数の地点ごとの平均

地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	新潟	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山
選択式	1.83	2.08	1.67	2.00	1.50	2.50	1.42	1.17	1.50	1.50	1.42	1.42	1.42
翻訳式	1.75	1.92	1.5	1.83	1.33	1.92	1.25	1.08	1.58	1.58	1.42	1.5	1.33

地点	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
選択式	1.08	1.5	1.17	1.08	2.83	2.17	2.00	1.67
翻訳式	1.0	1.33	1.08	1.5	2.0	2.17	2.08	1.75

表7 その1——平均回答案の項目ごとの平均

67	89	68	90	69	91	70	92	71	93	72	94	73	95	74	96	75	97	77	98	79	99	100	
1.17	1.17	1.19	1.19	1.05	1.19	1.00	1.00	1.09	1.17	1.01	1.12	1.05	1.10	1.03	1.09	1.07	1.11	1.14	1.24	1.03	1.03	1.03	1.05
1.10	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.00	1.00	1.09	1.05	1.01	1.05	1.05	1.05	1.03	1.03	1.07	1.11	1.14	1.24	1.01	1.01	1.01	1.03

表7 その2——平均回答案の地点ごとの平均

地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良
選択式	1.01	1.32	1.00	1.18	1.48	1.51	1.15	1.21	1.05	1.00	1.18
翻訳式	1.03	1.07	1.00	1.00	1.00	1.26	1.05	1.06	1.00	1.01	1.16

地点	和歌山	岡山	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
選択式	1.02	1.01	1.00	1.04	1.15	1.08	1.03	1.51	1.01	1.04
翻訳式	1.03	1.01	1.00	1.04	1.05	1.11	1.03	1.01	1.13	1.00

表8 その1——項目ごとの一致度の平均

項目	67-89	68-90	69-91	70-92	71-92	72-94	73-95	74-96	75-97	77-98	79-99	80-100
平均	0.81	0.82	0.78	0.97	0.75	0.80	0.77	0.88	0.83	0.72	0.94	0.95

表 8 その 2——地点ごとの一致度の平均

地点	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山	岡山
平均	0.83	0.78	0.80	0.70	0.85	0.72	0.81	0.92	0.81	0.98	0.86	0.86	0.96

地点	広島	高知	福岡	熊本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
平均	1.00	0.87	0.97	0.96	0.51	0.69	0.84	0.73

表 9 その 1

	67-89	68-90	69-91	70-92	71-93	72-94	73-95	74-96	75-97	77-98	79-99	80-100
首位の一致した地点	19	20	19	20	19	20	20	20	19	17	21	21
首位の一致しない地点数	2	1	2	1	2	1	1	1	2	4	0	0

表 9 その 2

	北海道	青森	岩手	福島	新潟	千葉	長野	愛知	石川	福井	奈良	和歌山
首位の一致したペアの数	10	12	12	12	11	11	11	10	11	10	12	12
首位の一致しないペアの数	2	0	0	0	1	1	1	2	1	2	0	0

	岡山	広島	島高	知高	福岡	岡本	宮崎	鹿児島	奄美	沖縄
首位の一致したペアの数	12	12	12	12	12	12	10	11	10	10
首位の一致しないペアの数	0	0	0	0	0	0	2	1	2	2